第 34 回　予知、予見、それとも…

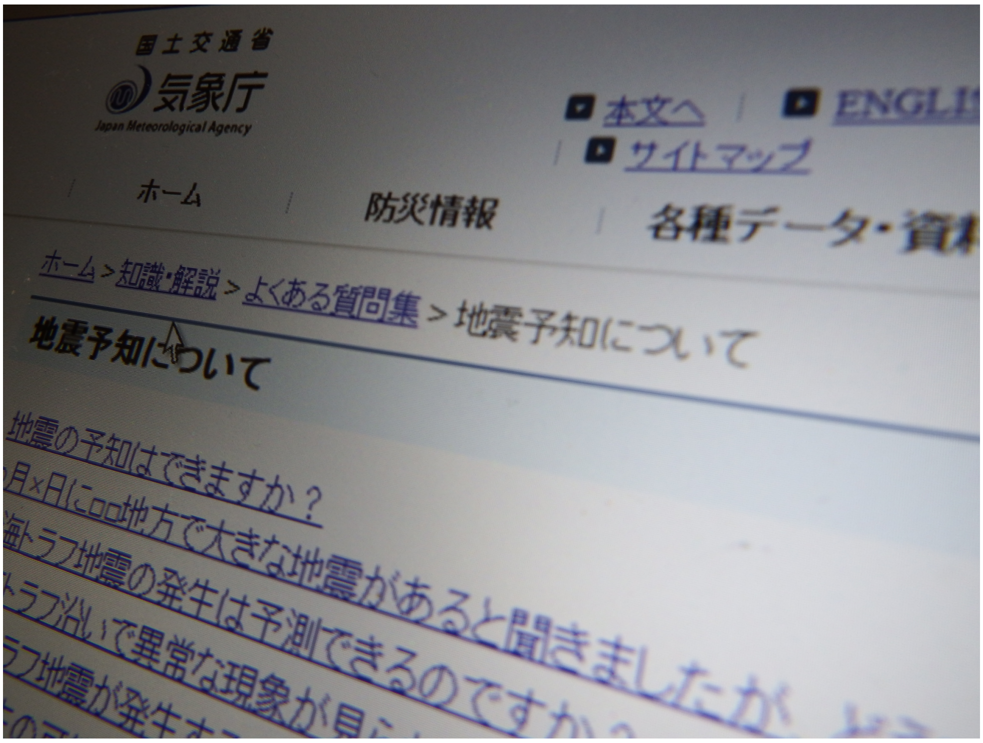
ＩＴ生

先日、日本列島の地震被害の特性についての記事を書いた。

かいつまんでいうと、地震によって被害が大きくなるのは堆積層の上にできている、都市部だということだった。地震学者の意見として書いたのだが、「学者は予知はやめたのではないのか？」という疑問が寄せられた。

記事の内容は、「地震がいつ起きるのか？」でもないし、「起きるのかどうか？」でもないのだが、どうも、日本人は、本来考えるべき「どのような被害が起きるのか？」ではなく、「地震が発生するのか否か」のほうに関心が向くらしい。

だいたい、気象庁の HP をみても、「被害」についてではなく、「地震」についての記述に偏っている。こういったことが日本人の意識に影響を与えているのだろう。寺田寅彦師は、こういった日本人の災害観を「日本人の科学観」として論じた。日本人にとって「科学」というものは、社会にどのような影響を与えるのかという「哲学」ではなく、便利なのかどうなのかという「科学技術」のことをさすのだと。



気象庁の「予知」に関する解説ページ。「地震」の発生に関する説明に終始している。

かつて、関東大震災の予知騒ぎというのがあったが、その発端となったのは東京帝国大の地震講座にいた今村明恒氏の論文（１９０５年）だった。これも、首都で地震が起きたらどのような被害が起きるのかということが主題であったのだが、世間は「間もなく首都圏で地震が起きる」と解釈して、大騒ぎとなった。偶然、１８年後に関東大震災が起きたので、今村氏への評価は「予知の神様」として定着してしまった。

日本人はどうにも、自然を科学技術をもって、御してしまいたいらしいと、寺田師は西洋文明に毒されたというのだが、ますます拍車がかかっているというほかない。科学技術をもって災害をコントロールしようと思えば、思うほど、「ここまでで大丈夫か？」と絶えず心配することになり、不安症に陥る。現代の日本人はまさにそのような精神状態なのだろう。いっそのこと、地震は起きるものと達観し、耐震化・家具固定を進めて、あとは知らんと覚悟を決めたほうが、どれほど楽になれるのかと思うのだが。

（平成 30 年 5 月）